成熟社会の都市計画と住環境整備の新たな方向に関する研究
—都市計画の新潮流と計画パラダイムの展開—

日端康雄　慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科　教授
小森　望　慶應義塾大学日端研究室
山本彩野　慶應義塾大学日端研究室

[研究報告要旨]

1990年バブル崩壊は単なる経済的事件ではなく、土地本位制の崩壊、工業化社会から次の脱工業化社会、都市化社会から都市型社会、成長社会から成熟社会への転換といった都市文明の大きな転換点に重なっている、とくに、1991年から2005年までの15年間は経済社会と制度などの大きな構造転換が相次ぎ、国民生活にとって実に困難な期間であった。

このような意味では、バブル崩壊は、明治動乱、敗戦につぐ近代日本の3つ目の社会動乱に匹敵する。

経済の長期停滞も、漸く昨年あたりから底を脱して、回復基調に入ったように見える。新たな時代形成の緒についたとも見える。経済現象は一般に急速で大きな変化になる。ひとつの波動を形成して実にダイナミックな現象である。速度の速い経済現象に後れて、社会制度やライフスタイル、文化の変化をともなう社会全体の変化、つまり、文明史的な構造的変化は、これから時間をかけて本格化していくものと思われる。

ところで、都市計画をはじめとする都市システムの基盤条件も大きな変化を経験しつつある。都市計画は大きな社会システム全体のひとつにすぎないが，こうした大きな時代潮流変化を直に受けて変わろうとしている。

この研究の狙いは、現在の混迷状況にあるともみえる都市計画のドラマチックな変化をどう捉え、経済社会の大きな潮流とのつながりをどう理解し、新たな都市のあり方やその計画の相対的枠組みを得ようとするものである。

第一章では、主として1991年以降の15年間の社会経済の大きな底流変化を見ようとしている。社会経済の現象の時系列分析を通じて、都市計画を取り巻く潮流をみる。

第二章では、この期間に生まれた新たな都市計画パラダイムを、文献研究を通じて、仮説的に導こうとするものである。

そして、第三章では、都市計画を学ぶ若い学生を対象に、次の時代を担う世代が都市計画の方向にどのような認識をしているかを明らかにする。

キーワード

1. バブル経済崩壊　2. 時系列分析　3. 時代潮流　4. 都市計画論　5. 都市論